

巻 頭 言

京都第一赤十字病院医学雑誌 第2巻発刊に寄せて

この度、京都第一赤十字病院医学雑誌の第二巻を発刊することになり、ご尽力された関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今回はベテランから若い世代にわたり、診療科5編、看護部3編、検査部1編、病理診断科1編、薬剤部1編の計9編の投稿があり大変うれしく思っております。

医学のベースは科学であります。近年、日本において、その基盤となる論文の“量と質”の低下が指摘されています。論文の“量”は、2003～2005年当時において米国について世界2位であったのが、2013～2015年では米国・中国・ドイツについて第4位となっています。論文の“質”を被引用数で評価すると、米国・英国・ドイツに次ぐ4位であったものが、2013～2015年ではフランス・イタリア・カナダ・オーストラリアにも抜かれ9位まで落ち込んでいます。

日本の論文数の少ない要因として、研究や論文作成を行う環境に乏しく学会発表から論文にする率が10%と、諸外国の30%以上に比し低いことが挙げられています。この雑誌発刊の意義も、少しでも論文作成の“文化”に貢献することにあります。

日本において論文にする率が低い理由として、業務が多忙にて研究や論文作成に充てる時間がないことも指摘されています。今後、医師の働き方改革に取り組んで行かなければなりません。働き方の効率を上げることにより、論文作成や研究に充てる時間を確保できる可能性があります。しかし、課題として、その時間のどこまでが業務で、どこからが自己研鑽に相当するのか、新たなルール作りが必要になります。予算などに限りはありますが、適切なインセンティブを確保し、学術活動が決して低迷しないように配慮していければと思う次第です。

さて、これからは医学の分野にもAIが活用され、業務だけでなく研究や論文作成のあり方が変化していくと考えられます。AIは多くのデータを処理するのに非常に有効なツールですが、リサーチ・クエスチョンなどの発想は、“人”の仕事として残ります。そして、研究や論文作成を通じ形成される人と人との“つながり”は、院内・院外を問わずその分野におけるコンセンサス形成を促し、“医療の質”を高めてくれます！

今後とも、京都第一赤十字病院医学雑誌の発刊を通して、科学の発展と社会貢献に寄与できることを願ひまして、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和1年11月1日
京都第一赤十字病院
院長 池田 栄人

